

キリスト教神学における歴史認識

—ラインホルド・ニーバーによる「恵み」の意味の解釈について—

Views on History in Christian Theology:

About Reinhold Niebuhr's Interpretation of Grace

佐久間 重

Atsushi SAKUMA

本論は、ラインホルド・ニーバーが彼の著作『人間の本性と運命』の中で神の「恵み」についてどのように解釈しているかを詳述したものである。ニーバーの解釈を通じて、キリスト者ではない人にとっては難解なキリスト教神学を解りやすくすることを狙いとしている。新約聖書にある神の「恵み」という教義は、一つには、神がキリストを通じて自分では罪を克服できない人間に与える「憐れみ」を意味し、もう一つには、人間の資質に神の「知恵」と「力」を分け与えることを意味する。神の「恵み」により人間は歴史の意味を知るのであり、そのことにより人間は罪を自覚し、歴史を創り出すことが不可能であることを知る。これはキリスト教信仰の特徴にもなっている。

This paper deals with the meaning of grace according to Reinhold Niebuhr's description about it in his famous book, *The Nature and Destiny of Man*. As the concept of grace in Christianity is difficult to understand for non-Christian people, it may be useful to show how Niebuhr interprets grace. The doctrine of grace in the New Testament represents on the one hand the mercy of God for man who cannot overcome his sinfulness. On the other hand grace is the power of God in man, enabling man to become what he truly ought to be. The doctrine of grace reveals one aspect of Christian faith.

キーワード：恵みの意味、歴史認識、ラインホルド・ニーバー
meaning of grace, views on history, Reinhold Niebuhr

I. はじめに

本論では、これまでに引き続きラインホルド・ニーバーの思想を取り上げ、彼の歴史の見方、つまりキリスト教神学者として歴史をどのように解釈しているかを紹介することにする。¹⁾ キリスト教には十字架上のイエスの痛々しい姿が象徴するように、人間にある残酷を露わにするとところもある。これは、キリストを通して表された神の「愛」を強調するためである。他方、

神の似姿としてのキリストは、人間のあるべき姿、さらには人間に備わっている力を思い起こさせることになる。人間に力があるからこそ、罪を犯すことにもなるのである。人間の力と罪という問題を解き明かす言葉が神の「恵み」と言う教義である。神の「恵み」について、ラインホルド・ニーバーがどのように解釈しているかについて、以下ではラインホルド・ニーバーの論述に沿って詳しく紹介することにする。²⁾

Ⅱ．神の恵みの意味

1. キリストの「知恵」と「力」

キリスト教のあらゆる啓示は、人間は自分では人生の真の意味を成就させることができないことを明らかにしている。聖書の中では、キリストを通してのみ「知恵」と「力」が人間にも可能になり、人生の意味が明らかにされるばかりでなく、その意味を成就する資質が人間に与えられるとされている。このために、キリスト教を信仰する人は、キリストの中に「真理」ばかりでなく、「恵み」をも見出すことになる。

歴史の中ではその意味は成就されないが、それを成就しようとする資質は人間に与えられているという認識にニーバーは立ち、人間は歴史の意味を成就出来ないが、成就しようとする資質はあるという相矛盾する側面を歴史の現実が持つ二つの側面に対応させている。その認識が新約聖書にある「恵み」という言葉の二つの意味に基づいていることを明らかにする。「恵み」は、一つには神の許しを表して、人間に対する神の力のことであるが、もう一つには、人間の中にある神の力を表し、人間が真にあるべきものになることを可能にするものである。これは、「神聖な精神」(Holy Spirit)と同義語であり、単に人間の精神の最高の段階ではなく、人間の中にある神の精神のことである。

人間自身のものではない資質による歴史の意味の成就というキリスト教思想の概念は、人間は信仰によってのみ自らの不完全さを超えた完全さを理解するという前提と結び付いている。キリスト教の啓示では、神は人間がなろうとする完成した姿だけでなく、人間に与える愛と知恵と力を持つとされている。信仰による人生の意味の成就を表す「神の知恵」という考えは、その中に「力」の意味も含んでいる。人間を超えたところからの人生の可能性と限界を理解すれば、人間は利己主義的で自己中心的な成就の形を打破できるようになる。悔い改めから出て来る新しい人生のあり方は、絶えず罪を意識することになる。それによる心の平穩は、許しを知ることから出て来る心の平穩の一部である。

2. 「恵み」という聖書の原理

ニーバーは恵みについての聖パウロの解釈を取り上げ、人間の心の中での罪の克服のための努力と、人間の心の中では完全には克服できない罪に対する神の慈悲深い力という恵みが持つ二つの側面を明らかにす

る。恵みについての二つの側面は、聖パウロ以降様々な解釈がなされ、恵みについての完全主義的な思想と、それに反対する宗教改革の思想が出て来た。シュラッター³⁾は、恵みの二つの側面を正しく解説している。彼によれば、神の許しへの人間の自覚と、神の恵みから出て来る正義への感覚により、二つの側面は統合されることになる。

完全主義的な解釈では、人間は神の恵みにより罪から完全に免れることが出来るようになることとされるが、ニーバーはこれだけでは不十分なところがあり、人間が罪を免れた後でも一切の罪を犯してはならないという禁止命令が必要である、としている。聖書に示されている意味は、神の恵みにより人間の自己愛が打破され、その結果キリストにおける神への献身が人間生活の中で実現する、と言うことである。聖パウロは、「肉体への意識」と「精神への意識」との違いを明らかにした。聖パウロが罪を犯してはいけないと言う時には、罪を断ち切った人々でも罪を犯す可能性があることも理解していたのである。聖パウロのこの解釈は、人間の完全さを否定する彼の言葉によって裏付けられている。人間の正義の中でも平和はないと聖パウロは述べている。聖パウロによれば、精神の平和は、まず神の許しへの人間の確信により、次に神への信仰により得られる。キリスト教を信仰する人には、キリストの正しさが分け与えられることになる。

この「正義の分与」という教義は、キリスト教信仰を道義的に解釈する人達には受け入れ難いものである。神の許しという概念は、道義論者の考えとは対立するものである。聖パウロの教えには、人間生活の中の罪深い腐敗への認識がある。そして、人間が罪を克服したと主張する時に、人間の罪が最も大きくなることを明らかにしている。キリストの受難は、罪に対する神の怒りを表しているが、このキリストを通してのみ人間は神の憐れみを得ることが出来る。十字架は、神の怒りに対する神の憐れみの勝利を象徴している。「正義の分与」という教義は、自己満足の手段にもなり得る。そして、人間は、神の恵みは豊富であるという認識をし、新たな罪を犯すことになる。この罪を凌駕するのが「信仰による義」という概念である。

新しい人生を創り出す神の力と、神がその恵みにより人間の罪を無効にする愛の力は均衡しているが、過去の罪を許すことを強調する聖パウロの考え方は、後者の力を強めることになる。聖パウロの考え方は、正義と罪の浄化との関係についての中世カトリック神学

の基礎となっていた。これによると、正義はその後の浄化の先駆けに過ぎず、両者の均衡は認識されていない。聖パウロ自身は、これに明確な結論を出しておらず、「恵みによる」正義が新しい形式主義を導いてしまうことになった。

「ローマ人への手紙」⁴⁾の中での聖パウロの告白は、正義が過去の罪にのみ適用されるという解釈を論破しようとする後のキリスト者達の標的として使われてきた。この告白によると、善を行わないからではなく、悪を行うから神の裁きがある、とされている。これに対して、ニーバーは、聖パウロが自らの告白をキリスト教への改宗前の状態に限定するとは信じられない、としている。いかなる人間も、心の中の矛盾から解放されることはない。正当化できない行為を単にユダヤ教の法に限定する意図が聖パウロにはあったと仮定する説があるが、ニーバーは、聖パウロの告白が「法」と「信仰」とに關していたことを考えると、その仮説は妥当ではないとしている。聖パウロは、形式主義に基づく正義の論拠をユダヤ教の特定の法に求めていたわけではない。

聖パウロは、ユダヤ教を超えたところに法の原理を拡大している。「福音」の中にある法は、伝統的な法よりも大きな意味を持っている。その法でもあらゆる状況にある善の可能性を扱うことが出来ないので、新約聖書では法が批判的に捉えられている。これらの可能性は、愛の法でのみ解釈出来る。聖パウロは、恵みの教義を重要視した。人間は、愛の中で新しい生活に目覚めるが、この生活の中でも罪の可能性があると聖パウロは説いている。

3. 人間の力、及び、人間への憐れみとしての恵み

力としての恵みと許しとしての恵みとの関係は、近代の思想では理解が困難である。これを理解するには、聖書の教義を人間の経験に当てはめて見ることであり、とニーバーは言う。そこで、ニーバーは、聖パウロの言葉を検証する。聖パウロは、「私はキリストと共に十字架にかけられた。私は生きているが、私の中で生きているのはキリストである。私は神の子への信仰によって生きている。」と述べたが、この言葉の順に、ニーバーはその意味を解釈して行く。

(一)「私はキリストと共に十字架にかけられた」

聖パウロは、キリストの死と復活を象徴として捉えて、古い生命の破壊と新しい生命の誕生として解釈した。古くて罪深い自己は、十字架にかけられなければ

ならない。人間は、自分が意図した善を行えないという苦境に陥ることがある。人間の自己は自由に創造されているが、自己の中で自己を実現することは困難である。自己を実現できるのは、友人との愛の関係においてである。しかし、この愛は、自己愛に変容してしまうことが多い。この弱さは、一つには、人間の有限性に起因する。そして、自己愛を克服しようとして、より高遠な見せかけを作り出してしまふ。これが、人間の隠れた不正直であり、精神的な混乱の元である。

自己に囚われたものは、聖パウロの言葉では、「十字架にかけられなければならない。」自己が救われるためには、自己を超えた視点が必要である。それが、神の力であり、神聖さである。キリスト教信仰では、自己と神を仲介するのがキリストであるとされている。この仲介が、神の憐れみと審判の啓示として結実する。絶望が悔い改めをもたらし、悔い改めが希望を引き起こすことになる。

(二)「私はそれでも生きている」

キリスト者となった新しい生活の中で、新しい自己を経験する。新しい自己は、神の愛の中で他者のために生きることを知る。新しい自己の構築の可能性は、自己を超えたところからの「力」と「恵み」から出て来る。近代の知識による自己の救済は、人間を心と体に分離する二元論に基づいている。この救済では、精神は活力を失い、肉体は精神性を失う。「私はそれでも生きている」という主張は、次の二つの見方を明らかにする。その第一は、自己は「力」を持った「精神」によって侵害されている、と言う主張である。第二は、自己の精神が自己が失われるまで拡大しようとする、と言うことである。「精霊」によらない自己の確保は、自己を自由の中で正しく扱うことの出来ない力や精神に服従することであり、自己を部分的に破壊してしまうことになる。ニーバーは、この具体的な例として、国民に無条件の献身を求める、宗教的な国家主義を挙げている。近代の自由な文化の中で、生活の成就が精神の拡大でしかない短絡的に捉えられてしまい、政治的な宗教が人間を虜にした。ここでも、自己は自己を超えたところから捉えられなければならないと言うニーバーの主張が繰り返される。

そして、自己がキリスト教の聖霊の様な概念以外で捉えられた場合には、自己が破壊的になることをニーバーは指摘する。その理由は、自己の精神が歴史の中のある特定の力と結び付くからである。キリスト教信仰では、キリストが自己の精神の基準とされている。

キリストにおける神の啓示は、神が歴史に介在することを表し、その介在を通じて神の神秘が人間の本質に道義的にも社会的にも関連することになる。さらに、神の啓示は、歴史の中で神性を人間に知らせる。よって、キリストは、精神の神聖さの基準であると同時に、神性と人間性との結び付きの象徴となる。

「私はそれでも生きている」という聖パウロの言葉は、悪魔に囚われた自己の腐敗を明らかにするばかりでなく、自己の成就と救済を説いている。神秘主義的、観念的自己成就の概念と、キリスト教的自己成就の概念との違いは、キリスト教の教義の中にある自己の実在性に求められる。キリスト教では、自己は有限性と自由さの統合とされており、自己に様々な段階がある訳ではない。神秘主義の救済の概念では、自己には様々な段階があるとされ、特に有限性に埋没した自己と、それを超越する自己が取り上げられている。キリスト教の教義では、罪深い自己は破壊されなければならないとされており、罪深い自己が破壊された時に新しい生命を持った自己が生まれることになっている。その点で、キリスト教の教義にある自己は、神秘主義で捉えられている自己よりも無力ではあるが、その反面で価値を持ったものである。

(三) 「私ではない私、キリストが私の中に生きている」

自己の再生についての聖パウロの主張の最後のものは、「私ではない私、キリストが私の中に生きている」というもので、ニーバーはこれを次の様に解釈している。この言葉は、恵みについてキリスト者が経験する二つの側面を表している。「私ではない」とは、新しい生活が人間自身の力の成果ではなく、神の恵みによるものであることを告白したものである。新しい生活は人間が実現したものではなく、キリストの意図によるものであることを表している。そこから、信仰による自己、恵みによる自己が出て来る。神の憐れみは、キリストの完全さを人間に認識させる。

聖パウロによると、自分自身では持てないものを持っていると言う意識と、信仰によってのみそれを持っていると言う意識は、表裏一体のものである。ニーバーは、聖パウロの言葉には、二つの意味が含まれていることが解るとして、以下でそのことを明らかにする。

(ア) 自己のものではない力としての恵み

罪深い自己愛の力を真摯に考えると、自己からの解放に感謝の意識が出る。神の真理は、自己中心的自己には「愚かしいこと」でしかないが、自己中心的自己

を打ち破る力となる。それが「私ではない私」と言う表現になる。

神の恵みだけが新しい生活の源泉だとすると、強制的に人間の責任を放棄させてしまう神の決定論が出て来る。この点から、ニーバーは、カルヴァンの予定説の持つ危険性を指摘し、神の決定論を肯定するバルトの神学を近代的急進派改革思想と位置づける。神の決定論は、聖書に根拠があることは否定出来ない。聖パウロも時には肯定した。しかし、神の決定論からは、人間の道義的無責任が出て来てしまう。これは、アウグスチヌスも指摘していて、人間の側には道義的な義務はなく、神がすべてを決定しているという言い訳を例として挙げた。この道義的無責任は、あまりにも決定論的であり過ぎる救済の概念から出て来る危険性の一つである。

人間の道義的無責任性の言い訳として使われることのある聖パウロの言葉は、神の恵みと人間の自由な意志との間にある逆説的な関係を表現している。「人間自身が自らの救済に恐れと共に取り組み」という聖パウロの言葉をニーバーは取り上げ、神の決定論に傾かず、人間の自由さと神の恵みとの関係を論ずる。限界を持った心でも自分自身の限界について幾分かの理解は出来る。限界を持った心にも、自らの人生を成就させようとする罪深い努力を不安視する良心がある。これをニーバーは神の恵みと人間の自然な能力との接点としている。これをルターは認めたが、カール・バルトは否定しようとした。接点がある限り、人間の中に神への問いかけが出来る何かがある。

ここで、ニーバーは、カトリック神学が神の恵みと人間の自由な意志とを正しく扱っているとして、この点ではアウグスチヌスや宗教改革の神学よりも正しいとし、トマス・アクィナスに言及する。アクィナスは、神の恵みと人間の意志を太陽の光と人間の視覚に喩えた。神の恵みは、太陽からの光であり、これがなければ人間はものを見ることが出来ない。太陽の光を遮られた人は、自分の目を太陽の方に向けて太陽の光を受けようとする。カトリック神学のこの神人協力説にも弱点があり、それは人間の活動と神の恵みを同じレベルで考察している点である。これを正すには、キリストの中にいる神だけが罪深い自己を再構築へと導き、自己は自らの心を解放しなければならないということである。罪深い自己のレベルでも、自己愛の不当さを意識出来る。しかし、自己が信仰により自らを超えたところに立つ時には、自らが行うすべてのものが恵み

に負うことを意識するようになる。これが恵みの奇跡である。宗教改革の神学は、恵みと人間の資質との関係について、そのレベルの高さを正しく扱うが、人間の自由の現実を否定するために両者の関係の複雑さを曖昧にする危険性を持っている。他方、カトリックの神学は、両者を正しく扱おうとするが、同じレベルで理解しようとする点に弱さがある。

(イ) 人間の罪を許すものとしての恵み

「私ではない私、キリストが私の中に生きている」という表現の二つ目の意味は、新しい人生は達成された現実ではないということである。そこで、「信仰による」人生の規範としてのキリストに焦点が当てられ、神の完全さを信じる人に神の恵みが与えられることになる。ニーバーは、恵みという教義の持つ人生経験への意義に言及し、信仰の中で理解された「神の知恵」がなければ、人間は罪の深刻さを意識出来ないことを指摘する。

人間は、人生において出て来る最高の経験を観念的に知っている。この観念では、人間は、自らの永遠性よりも正当性を求め、罪について深刻に考えることはない。キリスト教には審判の概念があるために、自らの正当化が阻まれている。聖書に従えば、「私は自分では何も知らないで、自分を判断するのは主である」という見方が出て来る。この見方は、神の恵みの成果である。神の恵みは、未来を見た時には「愚か」に思えても、過去を振り返る時に知恵となる。近代のキリスト教思想は、この解釈の有効性に関心を払っていない。

ここで、神の恵みを受けた信仰生活の中で、人間の自己愛が克服されるかどうかという問題をニーバーは提示し、それへの解答を論理の面から、また、経験の面から求めて行く。人間が自己愛の本質を探ると、それが神の愛とは両立しないことを自覚するが、これは論理的なことである。この自覚により自己愛が打ち破れる。しかし、キリスト教の歴史の経験の面からすると、この論理とは反対の方向に進んで来た。人間のプライドと精神的傲慢さが強くなったからである。キリスト教の歴史の悲しい側面は、新約聖書のルカ伝やマタイ伝などにある「取税人と罪人」の話に集約されている。彼らは、キリスト教会が福音の真理をおろそかにした時、キリスト教会への反論を繰り返していたが、彼らは人生を解釈する原理を持っている訳ではなかった。

個人生活でも、社会生活でも自己中心性を超克して

組織を作り出す可能性があるのと同時に、自己を組織の中心に据えてしまう可能性もある。前者の可能性が、神の恵みの成果である。後者の可能性は、克服が困難である。その理由は、自己が歴史の緊張の中にある限り、自己は自らの超越性を過大評価してしまうからである。ニーバーは、この問題を家庭生活を例として用いて、わかりやすく論じる。多くの家庭では、子どもの幸福を生活の目的にすることがある。他方、親は、家庭の愛情関係を家庭内の権力的手段としてしまう可能性がある。また、家庭の調和をより高い段階に高め、それを取り巻く共同体と結びつけて行く可能性があるが、家庭内の問題解決を優先させてしまうことが多い。国家についても、自分の国と他の国を調和させて行く可能性があるが、国家的エゴイズムをなくすことは困難である。こうして、近代の道義主義的思想家達は「信仰による正義の確立」の教義を過小評価してしまうのである。

最後にニーバーは、人間生活の論理的解釈の困難さを指摘し、信仰の意義を明らかにする。つまり、人間生活の様々な事実は、整合性のある論理で理解することは困難である、と言う。キリスト教の聖人達が罪人のままであったということを主張する神学は、人間生活での善の可能性を曖昧にしてしまうことになる。他方、人間の再生を肯定的に扱おうとする神学は、人間の徳の中に潜む罪の現実を曖昧にしてしまう。この両者の論点の違いを解決するのが神の恵みという考え方である、とニーバーは言う。人間の完全さが現実ではなく、神の意図であるとして理解したとしても、人間生活に道義を求めようとする意志を損なうことにはならないし、むしろ人生の完成についての誤った認識を押しとどめることになる。この点から、ニーバーは、近代の道義主義の思想が一面的であるとして批判し、神の恵みという宗教経験を持つことにより人間生活を正しくとらえることが出来る、と述べている。

III. おわりに

以上、ラインホルド・ニーバーの『人間の本性と運命』第二巻第四章を中心にして、神の「恵み」が歴史の意味にどのように関わっているかについてのニーバーの見解をまとめてみた。これにより、キリスト教神学とはどのようなものなのか、また、ニーバーの神学の特徴はどのようなものなのかの一端は紹介出来たと思う。ニーバーの思想はまだ十分に紹介し切れていないことが多いので、今後も続けて行くつもりである。

注

- 1) 佐久間重, キリスト教神学における歴史認識, ー
ラインホルド・ニーバーによる十字架の意味の
解釈について一名古屋文理大学紀要第7号(200
7年3月)参照.
- 2) Niebuhr R, *The Nature and Destiny of Man, II*,
Charles Scribner's Sons 98-126 (1943) を参照.
- 3) Adolf Schlatter (1852-1938). スイス生まれの神学
者で主にドイツで活動した. キリストの人性を強
調するリベラル神学を批判し, 新正統主義の先駆
者となったが, カール・バルト程には神の絶対性
を説かず, 歴史におけるキリストの意義を強調し
た.
- 4) 新約聖書の中の一書であり, 人は行いではなく信
仰によって神の前で義とされることを強調した内
容になっている.